

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 小室 惟

所属: 長野県飯田養護学校

記録日: 令和2年2月26日

キーワード: 重度重複障害、実態把握、OAK、観察、見通し

【対象児の情報】

- ・学年小学部 4 年 (R 児)
 - ・障害名脳室周囲白質軟化症、症候性ウエスト症候群
 - ・障害と困難の内容
- 知的障がい 肢体不自由 重度重複障がい

【活動目的】

- ・当初のねらい

2018 年魔法のダイアリー[惟1]では、**成果**および**今年度の実践のヒント**になるものを得た。

- ・R 児は刺激の種類にかかわらず、**刺激をきっかけとして「身体の動きおよび発声の減少」「視線が刺激の方を向く」「脱力」「笑顔」「笑う」「泣く」などで表出する。**

→日常生活の場面では、どのような刺激がきっかけになっているのだろうか？

→刺激の提示・R 児の表出をコミュニケーションに生かせないだろうか？

- ・環境が整えられていると刺激に気づくことができるが、**日常生活場面では、教室内は常時ざわざわしていることに加えて対象児の選択的注意の力が弱い**ため、自分に向けられた刺激に気づくことは難しい。

→刺激に気づける環境調整の工夫、教師のかかわり方の工夫ができないだろうか？

→刺激の提示をきっかけに、ほんの先の見通しを持てる学習活動や生活作りを模索できないだろうか？

そこで今年度は下記の3つの実践を計画し、R 児の表出を見通しやコミュニケーション成立のきっかけにしたいと考えた。

実践1 日常生活での表出を観察・整理する

実践2 コミュニケーションを成立させるための環境調整や教師のかかわり方を工夫する

実践3 R 児がほんの少し先の見通しを持った学習・生活づくりを模索する

- ・実施期間 2019 年 4 月～現在

- ・実施者 小室 惟

- ・実施者と対象児の関係 小学部2, 3年時担任

【活動内容と対象児の変化】

- ・対象児の事前の状況

<R 児の実態>

①理解

- ・環境が整えられた場所では、提示した刺激に気づくことができる。
- ・普段行き慣れない教室に移動したり普段かかわりのない職員がかかわったりすると、身体の動きや発声の減少が見られる。
- ・日常生活では刺激が統制されていないため、どんな刺激に反応を示したのか分かりにくい。

②感覚

感覚に対する実態把握を行った結果、次のような傾向が見られた。

【視覚】明暗は分かっているだろう。

【聴覚】小さな音も聞き取れていそうである。低音より高音の方が聞きやすいようである。

【触覚】チクチクやざらざらなど苦手な感触もありそうである。

③表出

・刺激を提示すると、5～15秒程度で身体の動きの減少、発声の減少などが見られやすい。

・対象児左側からの刺激の提示で表出が見られやすい。

・刺激の提示を止めると、身体の動きおよび発声の増加が見られやすい。

④身体

・歩行器に乗り蹴り上げるように進んだり、バランスボールに仰向けになって足を蹴り上げて揺れたりする。

・指を口や鼻腔に持っていくなどの意図的と思われる動きがあるが、目標物に手を伸ばすことは難しい。

・活動の具体的内容

実践Ⅰ 日常生活での表出を観察・整理する

○目的

感覚や表出の傾向が掴めてきている一方で、日常生活では刺激が統制されていないため、どんな刺激に反応を示したのか分かりにくい。そこで、日常生活でどのような刺激に気づいているのかを知るため観察を行った。

○観察の方法

・活動や休み時間の、他の先生とのかかわりや、物音等の刺激にどのような表出を示しているか観察する。

・自分がかかわる。活動の支援に入り(記録を取っているから、こういう刺激を提示してみようなどと思わずに)自然なかかわりをする。

○ICTの活用

・可能な範囲でiPhone/iPad標準搭載カメラでのビデオ撮影を行う。

○記録方法

・iPhone/iPadの標準搭載カメラでのビデオ撮影(可能な範囲で)

・記録用紙への記入(放課後等に記入)

ビデオ有無	回数(概算)	③直前の様子	②直前の出来事	①表出
○	1	バギーに乗り、顔も視線も正面を向いている。僅かに発声している。	H先生が、Rくんの左隣にいるOくんの名前を大声で呼んでいる(Oくんに覚醒させようとしていた)	発声が止まり、首を左上に反らせる。首の動きに合わせて視線も動いている。
○	4	仰臥位で寝ている、左側を向いて発声している。指を舐めている。	小室がRくんの右側に近づく	身体の動き及び発声が止まり、視線が右側に停留
○	4	バギーに乗り、視線をキョロキョロと動かしている。	小室が左斜め前から呼名。その後ゆっくり近づいて左手を触ってみる。	③と変化なし

表Ⅰ 記録用紙の記入例

○結果

・表1「①表出」を「身体の動きの増加」「身体の動きの減少」「③直前の様子とは異なる表出」「その他(③と変化なし)」の4つに分けて集計したところ(図1)、表出の半数以上が「身体の動きの減少」として表れていた。

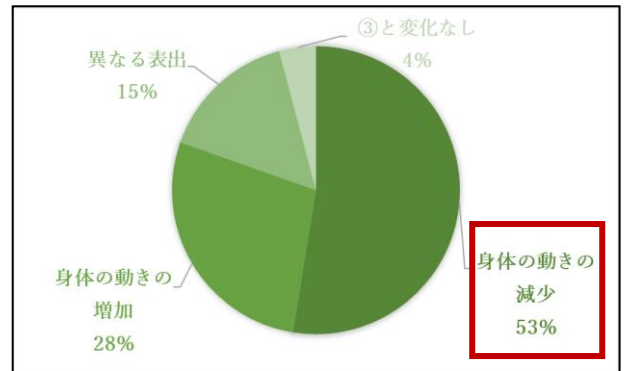


図1 表出の種類比較 (%)

これまでの実態把握場面でも刺激をきっかけとして「身体の動きの減少」が見られたことから、「身体の動きの減少」があるときには外界の刺激を受け取っていると判断してよいのではないかと考える。

・表1「②直前の出来事」を「視覚刺激」「聴覚刺激」「触覚刺激」の3つに分けて集計したところ(図2)、「聴覚刺激」が最も多く、次いで「触覚刺激」「視覚刺激」であった。

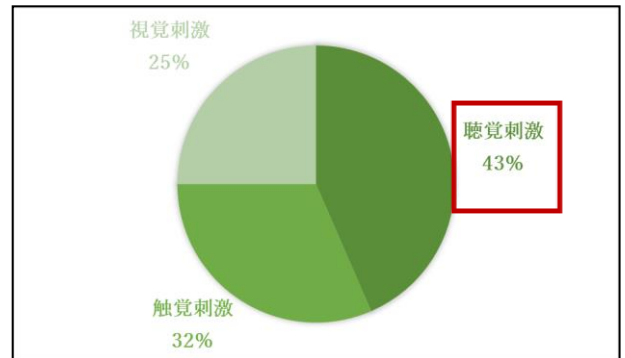


図2 直前の出来事比較 (%)

※ただしこちらが考えて分類している刺激の種類と、R児が感じ取った刺激が異なる可能性を考慮しなければならない。例えば「教師が近づく」という項目を「視覚刺激」と分類したが、R児は「足音が聞こえた」や「匂い」で感じ取っているかもしれない、ということである。

・図1, 2から「身体の動きの減少」があったときに、どのような「直前の出来事」があったのかを集計したところ(図3)、多い順に「聴覚刺激」「視覚刺激」「触覚刺激」であり、図2と比較すると「視覚刺激」と「触覚刺激」の順が異なっていた。

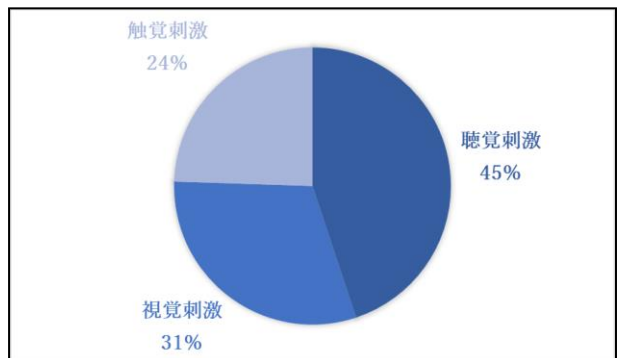


図3 「身体の動きの減少」時の直前の出来事比較 (%)

・図3から聴覚刺激の1つである呼名についての表出の傾向があるか確かめるため、聴覚刺激の種類を「呼名」と「それ以外の聴覚刺激(ロッカーの閉まる音、水の音など)」に分類して表出の種類を集計してみたところ(表2)、「呼名」「それ以外の聴覚刺激」「聴覚刺激全体」での表出はいずれも50%弱~60%強で推移していることが分かった。また、呼名に対しては「直前の様子との変化なし」が約20%であった。

	身体の動きの減少	身体の動きの増加	異なる表出	直前の様子との変化なし
呼名	47.6	33.3	0	19.0
それ以外	63.6	36.3	0	0

表2 聴覚刺激を「呼名」「それ以外」に分けたときの表出の出現率 (%)

○考察

図1～3から、これまでの実態把握場面と日常生活場面を合わせて考えると「身体の動きの減少」が表れているときは刺激をきっかけにしている傾向が強いと言える。また、その刺激の種類について、多少の差はあるものの、聴覚刺激・触覚刺激・視覚刺激全てに気づいていることが確認できる。このことから、強いて言えば聴覚刺激が気づきやすいと言えるが、日常生活場面においては視覚・聴覚・触覚のいずれの刺激にも気づいて表出していることが確認できた。

表2から、「呼名」と「それ以外の聴覚刺激」の表出の出現率は10%程度の差があるものの、刺激をきっかけに身体の動きの減少が多く表れることが確認できた。また呼名に対しては「変化なし」が約20%であった。理由については様々なことが考えられるが、実態把握場面で人の声を聞いて身体の動きの減少が見られたことから、「日常生活のざわざわした環境の中では人の声は聞き分けづらい」ことが挙げられるのではないだろうか。

それぞれの刺激をどのような頻度や大きさ(量)で提示するとR児が気づくだろうか？

⇒**実践2**へ

実践2 コミュニケーションを成立させるための環境調整や教師のかかわり方を工夫する

○目的

実施者はこれまで丁寧にかかわることを心がけ「抱っこするよ」「移動するよ」などの声掛けをしてきたが、「抱っこするよ」の言葉が示すこと(=これから抱っこされること)が伝わっていないと感じていた。声掛けしてもR児の表出が見られなかったからである。聴覚刺激の受け取りが強いR児であるが、表2から日常生活場面で人の声が届きづらい可能性も考えられる。これでは実施者からの一方通行のかかわりであり、コミュニケーションは不成立である。

そこで①提示する刺激を分解する、②聴覚刺激(これまでの「抱っこするよ」の声掛け)に加えて触覚刺激を提示する、③刺激を提示したら待つ(R児の刺激の受け取りから表出までは5～15秒程度あるとよい)ことで、R児が刺激に気づいて表出してから次の動きや活動に移ることがコミュニケーションの成立の鍵になるのではないかと考えた。

○環境調整やかかわり方の工夫

【「抱っこするよ」の予告の分解】

- ①「抱っこするよ」と声を掛ける(聴覚刺激)
- ②R児の首と膝下に腕を通す(触覚刺激・視覚刺激)
- ③少し待つ ⇒ R児が①②の刺激を受け取るまで待つ(写真1)
- ④身体の動きの減少、表情の変化等が見られたら、抱き上げる



写真1 抱っこの場で表出を待つ

○結果

繰り返し取り組んでいく中で、③で身体の動きの減少、発声の減少、脱力など、かかわりに気づいて表出している姿が見られた。

○考察

「抱っこする」という行為が伝わったか、というのは断言できないが、「②首と膝下に腕を通す」に含まれる触覚刺激、視覚刺激によって「何かが起こるのかも」と感じ、表出があったのではないかと考えられる。

日常生活場面のざわざわした環境でも、刺激を分解して提示するというかわり方で R 児が気づき表出することが明らかになった。これを基に、R 児の好きな活動を分解して提示することを繰り返すと、特定の刺激を提示されたときに「次はぐるぐる回るかも」「霧吹きの水が顔に掛かるかも」などと R 児が見通しを持つことにつながらないだろうか？

⇒実践3へ

実践3 R 児がほんの少し先の見通しを持った学習・生活づくりを模索する

○目的

R 児が活動の過程で「次はぐるぐる回るかも」「霧吹きの水が顔に掛かるかも」など、活動のほんの少し先の見通しを持つことにつながるように活動を分解して毎回同じ手順で活動を行い、見通しが持てる刺激の提示方法について検討する。

○活動の内容

【ローリングシーソー遊びの分解】

- ①R 児をローリングシーソーに乗せる
 - ②実施者（支援者）は R 児の正面以外（背後、横）に位置する
 - ③ローリングシーソーを「コン、コン、コン」と3回叩く（写真2）
 - ④少し待つ
 - ⑤ローリングシーソーを3周回す
- ※②～⑤を繰り返す



写真2 ③で支援者が横に位置してローリングシーソーを叩いている場面

○予想

- ・活動を繰り返していくうちに③で「このあとくるくる（回る）だ」と見通しを持ち、表出（発声の減少、表情の変化）があるのではないかと。

○結果

- ・予想のきっかけとして設定した③で様々な表出（発声の増加や減少、笑顔など）が見られた。
- ・⑤の後に横にいる実施者または支援者の方に視線を動かし、じっと見つめる様子が見られた。
- ・⑤のあと気分が高揚して笑いが止まらないときに、ローリングシーソーを素早く叩くと、笑いが減少し、脱力する様子が見られた。

○考察

- ・③で表出を確認することはできたが、それが R 児にとって見通しにつながったかどうかは外部からでは判断し難い。しかし、R 児が表出する様子が多々見られたことから、刺激を分解して提示することで R 児が表出しやすい状況を作ることができたのではないかと考える。
- ・活動を計画した時点では予想しなかった「⑤の後に横にいる支援者の方に視線を動かし、じっと見つめる様子」について、どの刺激がきっかけになったのかは断言しかねるが（匂い、人の動く影、息づかいなど様々なことが考えられる）、R 児が「こっちから音（③）がしたな」「またくるくる始まるかな」と期待感を持っている可能性が考えられる。今後も大切にしたい姿である。
- ・笑いが止まらないときにローリングシーソーを素早く叩いた時に笑いが減少し脱力したことについて、他の刺激を入れ

たことで切り替えのきっかけを作れたのではないかと考える。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

○「時間を掛けて観る」ことの大切さ

・以前は、とにかく子どもたちが笑顔を見せる活動に傾倒し、抱っこして勢いよく回る、布ブランコを思い切り揺らすなどのダイナミックな遊びを、表出が出るまで繰り返したり、表出がないとすぐに他の遊びに切替えたりしていた。今では、R児が情報を受け取り、何が起きているかを理解し、それが好きかどうかを判断するまでに必要な時間を取るよう意識している。

○「表出を観る」ことの大切さ

・R児に流れる時間に合わせて刺激を提示したり活動を進めたりすることで、笑顔だけではなく身体の動きの増減や「おや？」という表情を観察することを大切にしている。提示したものに対してR児が表出すると「伝わったんだな」と思い嬉しくなる。R児とのコミュニケーション成立の一場面だと捉え、今後も大切にしていきたい。

・予想していなかったR児の表出に出会うと「こんな小さな音にも気づくことができるんだ」「声掛けの方がいいと思っていたけれど、人の動きに伴う影(明暗)も実はよく見ているのかもしれない」などと驚きと嬉しさでいっぱいになり「次はどんな方法でかかわろうか」と考える癖がついてきている。

・その他エピソード(画像などを含めて)

○「近づく」「視界に入る」「呼名する」「手に触れる」場面でのR児の表出(視線運動の変化 コマ送り)

刺激を分解しR児が気づきやすいかわり方を目指した一場面である。時間の経過に伴って視線運動が減少、実施者のいる左側に固定されていく様子をコマ送りで示す。

①「Rくん、待っててね」と声を掛け、視野外に移動する。50秒間、キョロキョロと視線を動かし、舌の動きも見られた。



②実施者が黙ってR児の左側に座る(3秒コマ送り)。



0秒 視線が右を向いている

3秒 変化なし



6秒 視線が上側へ

9秒 視線が左側へ



12秒 再び視線が漂いかけて



15秒 左側へ「誰がいるかも?」と気づいた(?)

③顔を覗き込むように視界に入る



18秒 実施者が視界に入ったことに気づいたように視線が停留する。実施者と2秒目が合う。



20秒 キョロキョロと視線を動かす。

④「Rくん、勉強するか」と声掛けをする



28秒 声掛けに気づいたように視線が左を向く。実施者と1秒目が合う。



29秒 視線が上～右側へ

⑤手に触れる。



31秒 また目が合うが、すぐに視線が上側に。

○考察

- ・実施者が左側に位置してからR児の視線が上側～左側を向いたり、視線を左側に固定したりする様子が見られた。左側からの刺激が断続的に続いたため注意が向いたのだろうと考えられる。
- ・実施者と数回目が合っているが、1,2秒で再び視線が漂うのは、①実施者がいる(あるいは誰かが来たのかも、という感覚的な捉え)ことを確認できたので停留の必要が無い、②一瞬注意が向いたがR児を引きつけるだけのものではなかった、と考えられる。現時点では「おや、なんだ?」と注意を向けられることが大切と考え、今後は注意を向け続けることがあるかどうか、その必要性や方法(R児の興味関心に沿った学習などの計画)を検討したい。

